

## 今月のインタビュー

もり歯科医院 院長 森 康有 さま  
奥様 森 美穂子さま



歯科・小児歯科・矯正歯科

もり歯科医院

## 今月の女流・言葉涼し

津田 梅子さん

発行元 (株)日本総合コンサルティング/北野会計事務所  
発行日 2010年3月1日



『甲子園出場』という目標を持ち、高校進学を控えた私は、私立の野球の強豪校への進学を希望しました。裕福でない家計のことを考えるととんでもない話でしたが、両親は快く賛成してくれました。それほど大きな期待を寄せてくれていたのです。

当時の大阪の強豪校は、私学7強と言われていた次の私立高校でした。PL学園、近大附属、浪商、北陽、大鉄、興国、明星です。そして私が選んだ高校は、近大附属でした。その理由は次の3つです。

- (1) 中学時代の先輩がいたから。
- (2) 大学に進学できる可能性が高いから。
- (3) 高校の『学校案内』には、男女共学となっていたから。

上記(1)と(2)はご理解頂けるかもしれませんが、しかし(3)の理由がわかりにくいですね。それは、私は高校も男女共学がいいと思っていたからです。男だけの世界なんて想像できませんでしたから。しかし、強豪校の中で学校案内の男女共学欄にあった高校は近大附属の他はPL学園だけでした。ご存知の方もいるかもしれませんが、PL学園の野球部は推薦(スカウト)がなければ入部が認められていなかったの、私の選択肢は近大附属しかなかったのです。

ところが、当時の近大附属は男女共学ではなくて、男女別学だったのです。つまり、実際は男子高と変わらない、私の望む男女共学ではなかったということでした。これを知った時は愕然としました。その頃から、私は早とちりな性格でした。

さて、進学したい高校が決まりましたので、受験勉強はもちろん、野球のトレーニングも毎日欠かさず行いました。それは2キロほどのランニングと、父が新聞紙で作ってくれたボールを父に投げてもらい、ティーバッティングをすることでした。

そして無事に試験に合格し、入部した近大附属の野球部は新1年生が100人以上いて、レギュラー争いは大変だと思いました。しかし、入部当時は毎日毎日走るだけの練習でしたので新入部員はどんどん減り、1カ月もすると半分近くになっていました。ボールを使った練習をさせてもらえないので、中途半端な気持ちでいると長続きはしません。

そんな日々が続く中、いよいよバッティング練習が始まりました。初めは1人5球でした。そしてそのバッティング練習では父が手伝ってくれた自宅練習のおかげで、当時のコーチには特別に目をかけて頂きました。

しかし、その後私は両親の期待を大きく裏切ることになるのです。

北野の履歴書  
く夢の途中く  
北野慎二

## 第4回

～近大附属高校入学～

このコーナーでは、弊社代表北野慎二のこれまでの人生を、自らの言葉で2年(全24回)にわたってご紹介します。